

自社の強みとなるデータ活用を実現し他社と差別化を図る データ活用実行計画策定サービス

CATALOG

データ活用は他社との差別化要素であり自社のコアコンピタンスとなる

昨今は、どの企業もデータを活用することの重要性を把握し、データを武器にするために様々な施策をとっています。例えば、集客のためにレコメンドーション・システムの導入や、業績予測するためのシミュレーション系BIツールの導入などです。しかし、その施策は他社事例をそのままマネをしても成功にはつながりません。企業が保持しているデータはそれぞれの企業の差別化要素であるため、その企業の課題に対して最適な形で活用できなければ、本当の意味で役に立っている状況にはなりません。最適なデータの活用ができるようになれば、自社の強みとなり、ビジネスへ効果の出る施策と言えるでしょう。

まずは、自社のデータ活用成熟度を理解することが大切

データ活用を考えている企業の多くは、“データを活用できている自社の理想イメージ”を持っているのではないのでしょうか。しかし、上手く推進できていない企業は、おおまかな理想イメージはあるが、どのように実行していけばよいのか見えていない状態かと思われます。

なぜ上手く行かないのか。大きな要因の1つとして、自社の現状の姿を正確に捉えることが出来ておらず、推進していくために最初に手打すべき施策、その次に打つべき施策が明確にできていないことが挙げられます。その結果、推進途中で頓挫してしまったり、BIツールなどを先行導入したものの活用しているとは言えない状況になっています。

自社のデータ活用を成功に導くためには、自社の現状とあるべき姿を整理して、データ活用成熟度として表現することが重要です。そして、その成熟度に合わせて適切な施策を実行することにより、データ活用できる企業へ成長させることが出来ます。



参考例：活用成熟度のレベル設定

ご支援プラン

データを活用するためのポイントの教育と、現状分析し、あるべきデータ活用像を整理しながらデータ活用成熟度を整備していきます。「整備したデータ活用成熟度 = 自社のデータ活用ステップ像」となり、それに合わせて適切な施策を選定していき、実行計画として取りまとめます。

（ご参考手順）

手順1

教育によるポイント理解とアセスメントによりデータ活用する上で足りない事項を明確にする。

手順2

現状分析と課題定義。データ要件と現状データをマッピングしデータに関する課題を定義する。

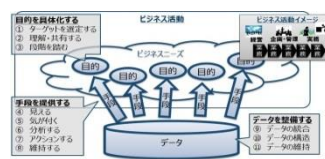
手順3

自社のステップアップ像を描いて、施策の優先順位を決定していく。

手順4

優先順位に基づいてロードマップを作成し、実行計画として取りまとめる。

（成果物連鎖）



活用成熟度	現状	課題	目標
LVL1	現場作業の効率化	現場作業の効率化	現場作業の効率化
LVL2	情報活用による判断と活動改善	情報活用による判断と活動改善	情報活用による判断と活動改善
LVL3	全社情報活用文化の定着	全社情報活用文化の定着	全社情報活用文化の定着

データ活用成熟度ステップ図



●上記以外でも様々なスタイルでご支援させていただいております。詳細は別途ご相談ください。

株式会社 データ総研

代表取締役社長 堀越 雅朗

1985年創立。データ設計と標準化を専門分野とするITコンサルティングファーム。

データ中心アプローチ(DOA)における先駆的企業であり、PLAN-DB®、PLAN-APL®など独自開発の設計技法や開発方法論をベースにコンサルティング事業を展開。データマネジメントの世界的教育・研究機関であるDAMA国際ナショナルから、データマネジメント知識体系(DMBOK)教育機関として認定を受けている。

上場企業を中心に多数のリーディングカンパニーへの支援実績を有する。

東京都中央区日本橋小伝馬町4-11サンコービル TEL:03-5695-1651 FAX:03-5695-1656 <http://www.drinet.co.jp>